



## レイヤ2インターフェイスの設定

- イーサネットインターフェイスの概要, on page 1
- レイヤ2インターフェイスのガイドラインおよび制約事項 (4 ページ)
- インターフェイス速度 (4 ページ)
- 40 ギガビットイーサネットインターフェイスの速度 (5 ページ)
- SVI 自動ステート (6 ページ)
- Cisco Discovery Protocol, on page 6
- errordisable ステート (7 ページ)
- デフォルトインターフェイス (8 ページ)
- デバウンス タイマー パラメータについて, on page 8
- MTU 設定, on page 8
- 物理イーサネットのデフォルト設定, on page 10
- インターフェイス情報の表示, on page 11

## イーサネットインターフェイスの概要

イーサネットポートは、サーバまたはLANに接続される標準のイーサネットインターフェイスとして機能します。

イーサネットインターフェイスはデフォルトでイネーブルです。

## インターフェイス コマンド

**interface** コマンドを使用すれば、イーサネットインターフェイスのさまざまな機能をインターフェイスごとにイネーブルにできます。**interface** コマンドを入力する際には、次の情報を指定します。

Cisco Nexus ファブリック エクステンダとの併用をサポートするために、インターフェイスのナンバリング規則は、次のように拡張されています。

**switch(config)# interface ethernet [chassis/]slot/port**

- シャーシ ID は、接続されている ファブリック エクステンダ のポートをアドレス指定するため使用できる任意のエントリです。インターフェイス経由で検出されたファブリック

## UDLD パラメータ

クエクステンダを識別するために、シャーシIDはスイッチ上の物理イーサネットまたはEtherChannelインターフェイスに設定されます。シャーシIDの範囲は、100～199です。

## UDLD パラメータ

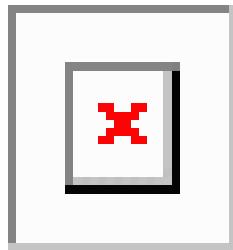
シスコ独自の單一方向リンク検出(UDLD)プロトコルでは、光ファイバまたは銅線(たとえば、カテゴリ5のケーブル)のイーサネットケーブルで接続されているポートでケーブルの物理的な構成をモニタリングし、單一方向リンクの存在を検出できます。スイッチが单方向リンクを検出すると、UDLDは関連するLANポートをシャットダウンし、ユーザに警告します。单方向リンクは、スパニングツリートポジループをはじめ、さまざまな問題を引き起こす可能性があります。

UDLDは、レイヤ1プロトコルと協調してリンクの物理ステータスを検出するレイヤ2プロトコルです。レイヤ1では、オートネゴシエーションは物理シグナリングと障害検出を行います。UDLDは、ネイバーのIDの検知、誤って接続されたLANポートのシャットダウンなど、自動ネゴシエーションでは実行不可能な処理を実行します。自動ネゴシエーションとUDLDの両方をイネーブルにすると、レイヤ1とレイヤ2の検出が協調して動作して、物理的な單一方向接続と論理的な單一方向接続を防止し、その他のプロトコルの異常動作を防止できます。

リンク上でローカルデバイスから送信されたトラフィックはネイバーで受信されるのに対し、ネイバーから送信されたトラフィックはローカルデバイスで受信されない場合には常に、單一方向リンクが発生します。対になったファイバケーブルのうち一方の接続が切断された場合、自動ネゴシエーションがアクティブであると、そのリンクのアップ状態は維持されなくなります。この場合、論理リンクは不定であり、UDLDは何の処理も行いません。レイヤ1で両方の光ファイバが正常に動作している場合は、レイヤ2でUDLDが、これらの光ファイルが正しく接続されているかどうか、および正しいネイバー間でトラフィックが双方向に流れているかを調べます。自動ネゴシエーションはレイヤ1で動作するため、このチェックは、自動ネゴシエーションでは実行できません。

Cisco Nexusデバイスは、UDLDがイネーブルになっているLANポート上のネイバーデバイスに定期的にUDLDフレームを送信します。一定の時間内にフレームがエコーバックされてきて、特定の確認応答(echo)が見つかなければ、そのリンクは單一方向のフラグが立てられ、そのLANポートはシャットダウンされます。UDLDプロトコルにより单方向リンクが正しく識別されその使用が禁止されるようにするために、リンクの両端のデバイスでUDLDがサポートされている必要があります。

次の図は、單一方向リンクが発生した状態の一例を示したものです。デバイスBはこのポートでデバイスAからのトラフィックを正常に受信していますが、デバイスAは同じポート上でデバイスBからのトラフィックを受信していません。UDLDによって問題が検出され、ポートがディセーブルになります。

**Figure 1:** 単方向リンク

## UDLD のデフォルト設定

次の表は、UDLD のデフォルト設定を示したものです。

**Table 1: UDLD のデフォルト設定**

機能	デフォルト値
UDLD グローバルイネーブルステート	グローバルにディセーブル
UDLD アグレッシブ モード	ディセーブル
ポート別の UDLD イネーブルステート（光ファイバ メディア用）	すべてのイーサネット光ファイバ LAN ポートでイネーブル
ポート別の UDLD イネーブルステート（ツイストペア（銅製）メディア用）	すべてのイーサネット 10/100 および 1000BASE-TX LAN ポートでディセーブル

## UDLD アグレッシブ モードと非アグレッシブ モード

デフォルトでは、UDLDアグレッシブモードはディセーブルになっています。UDLDアグレッシブモードは、UDLDアグレッシブモードをサポートするネットワークデバイスの間のポイントツーポイントのリンク上に限って設定できます。UDLDアグレッシブモードがイネーブルになっている場合、UDLDネイバー関係が確立されている双方向リンク上のポートがUDLDフレームを受信しなくなったとき、UDLDはネイバーとの接続の再確立を試行します。この再試行に8回失敗すると、ポートはディセーブルになります。

スパニングツリーループを防止するため、間隔がデフォルトの15秒である非アグレッシブなUDLDでも、（デフォルトのスパニングツリーパラメータを使用して）ブロッキングポートがフォワーディングステートに移行する前に、単方向リンクをシャットダウンすることができます。

UDLDアグレッシブモードをイネーブルにすると、次のようなことが発生します。

- リンクの一方にポートスタックが生じる（送受信どちらも）
- リンクの一方がダウンしているにもかかわらず、リンクのもう一方がアップしたままになる

## ■ レイヤ2インターフェイスのガイドラインおよび制約事項

このような場合、UDLD アグレッシブ モードでは、リンクのポートの 1 つがディセーブルになり、トラフィックが廃棄されるのを防止します。

# レイヤ2インターフェイスのガイドラインおよび制約事項

レイヤ2インターフェイスの設定には次の注意事項と制約事項があります。

- ・自動ネゴシエーションはサポートされません。
- ・1G 自動ネゴシエーションは N3K-C36180YC-R および N9K-X96136YC-R スイッチではサポートされません。この問題を回避するには、速度を手動で 1000 に設定する必要があります。ネイバーで自動ネゴシエーションが有効になっている場合は、それらのネイバーで自動ネゴシエーションを無効にする必要があります。
- ・Cisco Nexus N3K-C3636C-R および N3K-C36180YC-R スイッチでは、QSFP-100G-CR4 ケーブルを使用して 100G リンクを起動すると、ポート 49 ~ 64 で自動ネゴシエーションが機能しないことがあります。この問題を回避するには、ポート 49 ~ 64 の速度をハードコードし、自動ネゴシエーションを無効にする必要があります。

## インターフェイス速度

Cisco Nexus 36180YC-R スイッチには、デフォルト速度が 10 G の 48 個の Small Form-Factor Pluggable (SFP) ポートと、デフォルト速度が 100 G の 6 個の Quad Small Form-Factor Pluggable (QSFP) ポートがあります。48 個の SFP インターフェイスポートは、25 G、10 G、1 G の速度をサポートできます。6 個の QSFP インターフェイスポートは、100 G および 40 G の速度をサポートできます。

最初の 48 ポートでは、ポートグループの各 4 ポートに同じ速度が設定されている必要があります。一度に 1 つのポートを設定することはできません。エラーが発生する可能性があります。詳細については、[CSCve80686](#) を参照してください。

表 2: ブレークアウトモードのサポートマトリックス

スイッチ	4x10G	4x25G	2x50G
N3K-C3636C-R	はい	はい	はい
N3K-C36180YC-R	はい	はい	はい

## 40ギガビットイーサネットインターフェイスの速度

Cisco Nexus 3600 プラットフォーム ポートでは、QSFP ポートを 40 ギガビットイーサネット モードまたは 4x10 ギガビットイーサネット モードで動作させることができます。デフォルトでは、49 ~ 54 の番号が付けられた 6 つの QSFP インターフェイスポートがあり、40 ギガビットイーサネット モードで動作できます。これらの 40 ギガビットイーサネット ポートには、2 タプルの命名規則で番号が割り当てられます。たとえば、2 番目の 40 ギガビットイーサネット ポートには 1/50 という番号が割り当てられます。設定を 40 ギガビットイーサネットから 10 ギガビットイーサネットに変更するプロセスをブレークアウトと呼び、10 ギガビットイーサネットからギガビットイーサネットに設定を変更するプロセスをブレークインと呼びます。40G ポートを 10G ポートにブレークアウトする場合、得られたポートには 3 タプルの命名規則を使って番号が割り当てられます。たとえば、2 番目の 40 ギガビットイーサネット ポートのブレークアウト ポートには 1/49/1、1/49/2、1/49/3、1/49/4 という番号が割り当てられます。



(注) 40G ポートを 4x10G モードにブレークアウトするか、100G ポートを 4x25G モードにブレークアウトすると、ブレークアウトポートが管理上有効な状態になります。以前のリリースからのアップグレードでは、復元された設定によって、ポートの適切な管理状態が復元されます。



(注) 40 ギガビットイーサネットから 10 ギガビットイーサネットにブレークアウトするか、10 ギガビットイーサネットから 40 ギガビットイーサネットにブレークインすると、すべてのインターフェイス設定がリセットされ、影響を受けたポートは管理上使用できなくなります。これらのポートを使用可能にするには、**no shut** コマンドを使用します。



(注) 新しい QSFP+ 40 Gb トランシーバは、Cisco Nexus 3600 プラットフォームスイッチでサポートされています。新しい QSFP+ (40-Gb) トランシーバには、4 つの 10Gb SFP-10G-LR トランシーバとして分割されるケーブルがあります。これを使用するには、ポートを 4x10G モードにする必要があります。ブレークアウトケーブルを使用している場合は、その 40G ポートを 4x10G モードで動作させる必要があります。

40 ギガビットイーサネット ポートを 4 つの 10 ギガビットイーサネット ポートにブレーク アウトし、4 つの 10 ギガビットイーサネット ポートを 40 ギガビットイーサネット ポートに動的にブレークインする機能により、永続的に定義せずに、任意のブレークアウト対応 ポートを 40 ギガビットイーサネット または 10 ギガビットイーサネット モードで動作させることができます。

**SVI 自動ステート**

## SVI 自動ステート

スイッチ仮想インターフェイス (SVI) は、デバイスの VLAN のブリッジング機能とルーティング機能間の論理インターフェイスを表します。デフォルトでは、VLANインターフェイスが VLAN で複数のポートを有する場合、SVI は VLAN のすべてのポートがダウンするとダウン状態になります。

自動ステートの動作は、対応する VLAN のさまざまなポートの状態によって管理されるインターフェイスの動作状態です。VLAN の SVIインターフェイスは、VLAN に STP フォワーディングステートのポートが少なくとも 1 個ある場合にアップになります。同様に、このインターフェイスは最後の STP 転送ポートがダウンするか、別の STP 状態になったとき、ダウンします。

デフォルトでは、自動ステートの計算はイネーブルです。SVIインターフェイスの自動ステートの計算をディセーブルにし、デフォルト値を変更できます。

## Cisco Discovery Protocol

Cisco Discovery Protocol (CDP) は、すべてのシスコデバイス（ルータ、ブリッジ、アクセサーバ、およびスイッチ）のレイヤ 2 (データリンク層) で動作するデバイス検出プロトコルです。ネットワーク管理アプリケーションは CDP を使用することにより、既知のデバイスのネイバーであるシスコ デバイスを検出することができます。CDP を使用すれば、下位レイヤのトランスペアレントプロトコルが稼働しているネイバー デバイスのデバイス タイプや、簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) エージェントアドレスを学習することもできます。この機能によって、アプリケーションからネイバー デバイスに SNMP クエリーを送信できます。

CDP は、サブネットワークアクセスプロトコル (SNAP) をサポートしているすべてのメディアで動作します。CDP はデータリンク層でのみ動作するため、異なるネットワーク層プロトコルをサポートする 2 つのシステムで互いの情報を学習できます。

CDP が設定された各デバイスはマルチキャストアドレスに定期的にメッセージを送信して、SNMP メッセージを受信可能なアドレスを 1 つまたは複数アドバタイズします。アドバタイズには、存続可能時間 (保持時間) や情報も含まれています。これは、受信側のデバイスが CDP 情報を破棄せずに保持する時間の長さです。各デバイスは他のデバイスから送信されたメッセージも待ち受けて、ネイバー デバイスについて学習します。

このスイッチは、CDP バージョン 1 とバージョン 2 の両方をサポートします。

## CDP のデフォルト設定

次の表は、CDP のデフォルト設定を示したものです。

**Table 3: CDP のデフォルト設定**

機能	デフォルト設定
CDP インターフェイス ステート	有効
CDP タイマー (パケット更新頻度)	60 秒
CDP ホールドタイム (廃棄までの時間)	180 秒
CDP バージョン 2 アドバタイズ	有効 (Enabled)

## errdisable ステート

あるインターフェイスが errdisable ステートであるというのは、そのインターフェイスが管理上は (**no shutdown** コマンドにより) イネーブルになっていながら、実行時に何らかのプロセスによってディセーブルになっていることを指します。たとえば、UDLD が単方向リンクを検出した場合、そのインターフェイスは実行時にシャットダウンされます。ただし、そのインターフェイスは管理上イネーブルであるため、そのステータスは errdisable として表示されます。いったんインターフェイスが errdisabl ステートになったら、手動で再イネーブル化する必要があります。あるいは、自動タイムアウト回復値を設定しておくこともできます。errdisable 検出はすべての原因に対してデフォルトでイネーブルです。自動回復はデフォルトでは設定されていません。

インターフェイスが errdisable ステートになった場合は、**errdisable detect cause** コマンドを使用して、そのエラーに関する情報を取得してください。

errdisable の特定の原因に対する errdisable 自動回復タイムアウトを設定する場合は、time 変数の値を変更します。

**errdisable recovery cause** コマンドを使用すると、300 秒後に自動回復します。回復までの時間を変更する場合は、**errdisable recovery interval** コマンドを使用して、タイムアウト時間を指定します。指定できる値は 30 ~ 65535 秒です。

インターフェイスが errdisable からリカバリしないようにするには、**no errdisable recovery cause** コマンドを使用します。

**errdisable recover cause** コマンドには、以下のさまざまなオプションがあります。

- all : すべての原因からの回復タイマーをイネーブル化します。
- bpduguard : ブリッジプロトコルデータユニット (BPDU) ガードの errdisable ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。
- failed-port-state : スパニングツリープロトコル (STP) のポート設定状態障害からの回復タイマーをイネーブル化します。
- link-flap : リンクステート フラッピングからの回復タイマーをイネーブル化します。

## ■ デフォルトインターフェイス

- pause-rate-limit : ポーズレートリミットの errdisable ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。
- udld : 単方向リンク検出 (UDLD) の errdisable ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。
- loopback : ループバック errdisable ステートからの回復タイマーをイネーブル化します。

特定の原因に対し、errdisable からの回復をイネーブルにしなかった場合、errdisable ステートは、**shutdown** および **no shutdown** コマンドを入力するまで続きます。原因に対して回復をイネーブルにすると、そのインターフェイスの errdisable ステートは解消され、すべての原因がタイムアウトになった段階で動作を再試行できるようになります。エラーの原因を表示する場合は、**show interface status err-disabled** コマンドを使用します。

## デフォルトインターフェイス

デフォルトインターフェイス機能を使用して、イーサネット、ループバック、管理、VLAN、およびポートチャネルインターフェイスなどの物理インターフェイスおよび論理インターフェイスの両方に対する設定済みパラメータを消去できます。

## デバウンス タイマー パラメータについて

デバウンスタイマーを設定するとリンク変更の通知が遅くなり、ネットワークの再設定によるトラフィック損失が減少します。デバウンスタイマーはイーサネットポートごとに個別に設定します。遅延時間はミリ秒単位で指定できます。遅延時間の範囲は0~5000ミリ秒です。デフォルトでは、デバウンスタイマーは100 msに設定されており、デバウンスタイマーは動作しません。このパラメータが0ミリ秒に設定されると、デバウンスタイマーはディセーブルになります。



### Caution

デバウンスタイマーをイネーブルにするとリンクアップおよびリンクダウン検出が遅くなり、デバウンス期間中のトラフィックが失われます。この状況は、一部のレイヤ2とレイヤ3プロトコルのコンバージェンスと再コンバージェンスに影響する可能性があります。

## MTU 設定

スイッチは、フレームをフラグメント化しません。そのためスイッチでは、同じレイヤ2 ドメイン内の2つのポートに別々の最大伝送単位 (MTU) を設定することはできません。物理イーサネットインターフェイス別 MTU はサポートされていません。代わりに、MTU は QoS クラスに従って設定されます。MTU を変更する場合は、クラスマップおよびポリシーマップを設定します。



**Note** インターフェイス設定を表示すると、物理イーサネットインターフェイスに1500というデフォルトのMTUが表示されます。

## カウンタ値

設定、パケットサイズ、増分カウンタ値、およびトラフィックについては、次の情報を参照してください。

設定	パケットサイズ	増分カウンタ	トラフィック
L2 ポート：MTU 設定なし	6400 および 10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
L2 ポート：ネットワーク QoS 設定のジャンボ MTU 9216	6400	Jumbo	Forwarded
L2 ポート：ネットワーク QoS 設定のジャンボ MTU 9216	10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
network-qos 設定のデフォルトレイヤ3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ3ポート	6400	Jumbo	パケットは CPU にパンくされ (CoPP 設定の対象)、フラグメント化されてから、ソフトウェアによって転送されます。
network-qos 設定のデフォルトレイヤ3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ3ポート	6400	Jumbo	パケットは CPU にパンくされ (CoPP 設定の対象)、フラグメント化されてから、ソフトウェアによって転送されます。
network-qos 設定のデフォルトレイヤ3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ3ポート	10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
network-qos 設定のジャンボ レイヤ3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ3ポート	6400	Jumbo	フラグメントーションなしで転送されます。

## ■ ダウンリンク遅延

設定	パケットサイズ	増分カウンタ	トラフィック
network-qos 設定のジャンボ レイヤ3 MTU およびジャンボ MTU 9216 のレイヤ3ポート	10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped
ジャンボ レイヤ3 MTU およびデフォルト L2 MTU 設定のレイヤ3ポート	6400 および 10000	ジャンボ、ジャイアント、および入力エラー	Dropped



(注)

- CRC 正常の 64 バイト未満のパケット : ショートフレームカウンタが増加します。
- CRC 不良の 64 バイト未満のパケット : runts カウンタが増加します。
- CRC 不良の 64 バイトを超えるパケット : CRC カウンタが増加します。

## ダウンリンク遅延

Cisco Nexus 3048 スイッチのリロード後、ダウンリンク RJ-45 ポートの前に、アップリンク SFP+ ポートを動作可能にできます。SFP+ ポートが有効になるまで、ハードウェアで RJ-45 ポートの有効化を遅らせる必要があります。

リロード中に、指定したタイムアウト後にのみハードウェアでダウンリンク RJ-45 ポートを有効にするタイマーを設定できます。このプロセスにより、アップリンク SFP+ ポートが最初に動作可能になります。タイマーは、admin-enable であるポートに対してのみハードウェアで有効になります。

デフォルトではダウンリンク遅延は無効になっているため、明示的に有効にする必要があります。有効にした場合、遅延タイマーが指定されていないと、デフォルトの遅延 20 秒に設定されます。

## 物理イーサネットのデフォルト設定

次の表に、すべての物理イーサネットインターフェイスのデフォルト設定を示します。

パラメータ	デフォルト設定
デュプレックス	オート（全二重）
カプセル化	ARPA

パラメータ	デフォルト設定
MTU <sup>1</sup> 。	1500 バイト
ポート モード	アクセス (Access)
スピード	オート (10000)

<sup>1</sup> MTU を物理イーサネットインターフェイスごとに変更することはできません。MTU の変更は、QoS クラスのマップを選択することにより行います

## インターフェイス情報の表示

定義済みインターフェイスに関する設定情報を表示するには、次のうちいずれかの手順を実行します。

コマンド	目的
switch# <b>show interface type slot/port</b>	指定したインターフェイスの詳細設定が表示されます。
switch# <b>show interface type slot/port capabilities</b>	指定したインターフェイスの機能に関する詳細情報が表示されます。このオプションは、物理インターフェイスにしか使用できません。
switch# <b>show interface type slot/port transceiver</b>	指定したインターフェイスに接続されているトランシーバに関する詳細情報が表示されます。このオプションは、物理インターフェイスにしか使用できません。
switch# <b>show interface brief</b>	すべてのインターフェイスのステータスが表示されます。
switch# <b>show interface flowcontrol</b>	すべてのインターフェイスでフロー制御設定の詳細なリストを表示します。

**show interface** コマンドは、EXEC モードから呼び出され、インターフェイスの設定を表示します。引数を入力せずにこのコマンドを実行すると、スイッチ内に設定されたすべてのインターフェイスの情報が表示されます。

次に、物理イーサネットインターフェイスを表示する例を示します。

```
switch# show interface ethernet 1/1
Ethernet1/1 is up
Hardware is 1000/10000 Ethernet, address is 000d.eca3.5f08 (bia 000d.eca3.5f08)
MTU 1500 bytes, BW 10000000 Kbit, DLY 10 usec,
    reliability 255/255, txload 190/255, rxload 192/255
Encapsulation ARPA
Port mode is trunk
full-duplex, 10 Gb/s, media type is 1/10g
Input flow-control is off, output flow-control is off
Auto-mdix is turned on
Rate mode is dedicated
Switchport monitor is off
```

## ■ インターフェイス情報の表示

```
Last clearing of "show interface" counters never
5 minute input rate 942201806 bytes/sec, 14721892 packets/sec
5 minute output rate 935840313 bytes/sec, 14622492 packets/sec
Rx
 129141483840 input packets 0 unicast packets 129141483847 multicast packets
 0 broadcast packets 0 jumbo packets 0 storm suppression packets
 8265054965824 bytes
 0 No buffer 0 runt 0 Overrun
 0 crc 0 Ignored 0 Bad etype drop
 0 Bad proto drop
Tx
 119038487241 output packets 119038487245 multicast packets
 0 broadcast packets 0 jumbo packets
 7618463256471 bytes
 0 output CRC 0 ecc
 0 underrun 0 if down drop      0 output error 0 collision 0 deferred
 0 late collision 0 lost carrier 0 no carrier
 0 babbie
 0 Rx pause 8031547972 Tx pause 0 reset
```

次に、物理イーサネットの機能を表示する例を示します。

```
switch# show interface ethernet 1/1 capabilities
Ethernet1/1
  Model:          734510033
  Type:           10Gbase-(unknown)
  Speed:          1000,10000
  Duplex:         full
  Trunk encap. type: 802.1Q
  Channel:        yes
  Broadcast suppression: percentage(0-100)
  Flowcontrol:    rx-(off/on),tx-(off/on)
  Rate mode:       none
  QOS scheduling: rx-(6q1t),tx-(1p6q0t)
  CoS rewrite:    no
  ToS rewrite:    no
  SPAN:           yes
  UDLD:           yes
  MDIX:           no
  FEX Fabric:     yes
```

次に、物理イーサネット トランシーバを表示する例を示します。

```
switch# show interface ethernet 1/1 transceiver
Ethernet1/1
  sfp is present
  name is CISCO-EXCELIGHT
  part number is SFP5101SR-C1
  revision is A
  serial number is ECL120901AV
  nominal bitrate is 10300 Mbits/sec
  Link length supported for 50/125mm fiber is 82 m(s)
  Link length supported for 62.5/125mm fiber is 26 m(s)
  cisco id is --
  cisco extended id number is 4
```

次に、インターフェイスステータスの要約を表示する例を示します（出力の一部を割愛しています）。

```
switch# show interface brief
```

---

Ethernet Interface	VLAN	Type	Mode	Status	Reason	Speed	Port Ch #
<hr/>							
Eth1/1	200	eth	trunk	up	none	10G(D)	--
Eth1/2	1	eth	trunk	up	none	10G(D)	--
Eth1/3	300	eth	access	down	SFP not inserted	10G(D)	--
Eth1/4	300	eth	access	down	SFP not inserted	10G(D)	--
Eth1/5	300	eth	access	down	Link not connected	1000(D)	--
Eth1/6	20	eth	access	down	Link not connected	10G(D)	--
Eth1/7	300	eth	access	down	SFP not inserted	10G(D)	--
...							

次に、CDP ネイバーを表示する例を示します。

```
switch# show cdp neighbors
Capability Codes: R - Router, T - Trans-Bridge, B - Source-Route-Bridge
                  S - Switch, H - Host, I - IGMP, r - Repeater,
                  V - VoIP-Phone, D - Remotely-Managed-Device,
                  s - Supports-STP-Dispute
Device ID          Local Intrfce   Hldtme  Capability Platform      Port ID
d13-dist-1        mgmt0          148     S I         WS-C2960-24TC Fas0/9
n5k(FLC12080012)  Eth1/5          8       S I s       N5K-C5020P-BA Eth1/5
```

## ■ インターフェイス情報の表示

## 翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。